

家族から
多くの愛に支えられて



長山 律子

平成14年6月27日朝、夫はいつもと違う体の調子を感じて出勤した。

「株主総会を終えたら一緒に病院へ行きましょう」と約束し、一方「今日はお花を用意して夫の労をねぎらいましょう」と考えていた。

結婚して「夫元気で留守がいい」と互いに謳歌し定年後もその延長線で更にそれぞれ個性を發揮できるものと何の疑いも持たずにいた私たちは、突然の、夫の「脳梗塞」という病に出合った。

実感としてこの病の大変さを知ったのは退院をして一年、更に一年と、夫の心の焦りが大きくなって行ったことであった。

入院当初は一日の事柄をただ、ただ受け入れることで精一杯。

今迄の生活が嘘のように時がゆっくりと過ぎてゆき、夫婦二人だけの生活に一変して行った。

夫は一日も早く元のような身体になることを願いつつ、病院でのリハビリはいつも開始時間前に、真っ先に並んで一日を費やしていた。

しかし病から来る感情障害と身体の回復力の遅さは更に精神を圧迫して行った。

私は「少しでも夫の心の負担を軽くすることが出来たら」と自分の心は無にして夫と一体になろうと努力した。

しかし私にとっても、この病は初めて。

何気無い言葉が夫を傷つけ、その事に自分が傷つき、私もまたストレスが溜まる中、夫に献身的に尽くすことでの満足感は、たとえそれが私だけの幸福であれ、『どんな状況の中にも幸せはあるものなのだ』ということを知った。

退院後の夫は、リハビリに通う駅毎に書店を探し、何かをひたすら求めていた。

そして『心が動く 脳卒中片マヒ者、心とからだ15年』（森山志郎著／荘道社刊）に出会った。ご夫婦のありのままの心の変化と深い洞察力、真理の導きに、「これこそ求めていたもの！」と、感動にこころ震えた。

さっそく片マヒ自立研究会に参加させて頂き、和やかな雰囲気の中に溶け込むことができた。

驚いたことに会員の方々が皆、個性を發揮し、前を向いて生きているお姿は美しく、健康な私以上により健康的な生き方をしていらっしゃると感動的であった。

そしていつも決まって帰路に向かう新幹線の中では、私たちが癒され幸福であることの不思議さに会話が弾んでいた。

会長の奥様は、頑張っていた私を感じてか「ご主人とは両足をどっぷりつけなくて片足だけにして行くといいですよ。少しずつね」と、やさしく助言して下さいました。

その言葉は「肩の力を軽くしたらいいですよ」と言われているようでもあった。

本当の意味での「自立を心がけていこう」と決めた私にとって大きな節目の時でもあった。

そして、私たちは進む道を模索しながらも、夫の本の出版に向けての共同作業は、物づくりの楽しみを味わい、完成は希望へと転じて行った。

先の見えない迷路の中を歩きつ戻りつ、一步一步お互いを確認しながら前進して行った。

幾多の山坂を越え4年の歳月が経った今、夫の病によって、とても大切な経験をしてきたことに気づく。

夫婦が真っ直ぐに向き合って生きることの大切さ。そして多くの方々と出会い、多くの愛に支えられていることに改めて感謝の思いを抱く。

それは又「深く人を思いやる心」を引き出して行った。泣くことによって気づくことも又ある。

健康な時にもその様なことが無かったわけではないのに、その違いはあまりにも大きく感じる。

リハビリの先生が『人生に障害ありきですよ』とおっしゃったことの意味が解るような気がする。人生の様々な体験を全てを良しとして感謝し、老いに向かう人生を大切に学んで行きたいと切に思える日々感謝している。